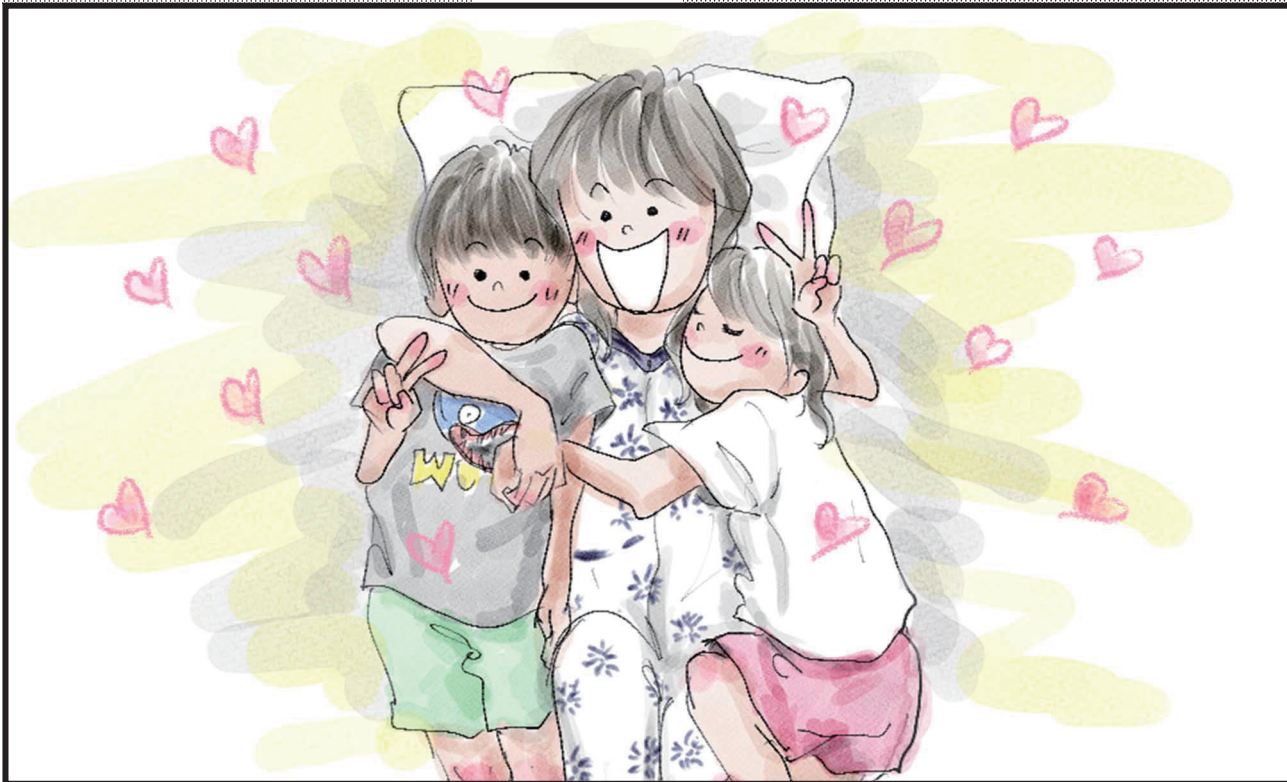


よびごえ

因速寺機関誌

VOL, 142



この表紙の絵を約34年前から描き続けてきたのが坊守・武田美輪です。しかし、今年の十一月一日に浄土へ還りましたので、もう描くことができません。そこで、美輪のお友達である佐々木瑞穂さんをお願いすることとなりました。これは美輪が生前、瑞穂さんにお願ひしていたことであり、ころよくお引き受け下さり、感謝しております。今回の絵は、美輪がファミリーホスピス西葛西に入院していたときの写真を題材に描かれております。孫を面会に連れて行きましたら、二人の孫は美輪のベッドによじ登り、なんと三人で横になったのです。七歳の孫は、「あーちゃん、だーい好き！」と美輪に抱きつき、五歳の孫は、てれくさそうにピースをしました。この「愛」というものに包まれた一瞬を写真に収めることができました。またそれをフアンタジーで描いて下さり、より「愛」が説得力を増しました。人類というものは、原始未開の時代から、「愛」の力で生き抜いてきた生き物でしょう。親から子へ子から孫へと、いのちのありのままを教育してきたのです。出棺前の花入れ式の時、四人の孫たちはお花を丁寧に棺に入れました。こうやって人間はいのちを終わっていくものだ、と、美輪は孫たちに「先の教育」をして旅立っていきました。

坊守が「死」にしました

武田 釋定光（住持職）
しやくじようこう

■坊守の旅立ち■ ぼうもり

二〇二五（令和七年）十一月一日午前八時四〇分に、坊守（俗名・武田美輪・法名・定光院釋尼芳輪）が、六十六年という人生を終え、この娑婆から浄土へと旅立ちました。

約四十五年間、因速寺全体を支えて下さいました。ここに、ご門徒の皆様から、長年に渡り頂きましたご厚誼、ご厚情に際しまして、こころより御礼申し上げます。

さて、私と坊守との縁は、京都にある大谷大学の仏教青年会でした。そこで出会ってから、四十五年間を伴侶として、生活を共にしてきました。

ところが、二〇二〇年に大腸癌が見つかり、様々な治療に挑戦しましたが、思うように行かず、二〇二五年に浄土へ還りました。

■彼女の存在とは何だったのか■

浄土へ還りましてから、彼女の存在とは何だったのだろうかという問いが生まれました。確かに、彼女は存在していました。いまだに彼女の衣服はたくさん残っていますし、私と過ごした思い出もたくさんあります。葬儀のとき、「思い出ギヤラリー」を設え、大勢の皆さんに見てもらいました。間違いなく存在していたのですが、いま、目の前にあるのは「白骨」だけです。

あの声も聞こえず、身体も触ることができません。つまり、彼女はどこにも居ないのです。そうになると益々、彼女の存在とは何だったのだろうかという思いが強くなりました。

ひとの自我は、球体をしていて、その球体は、あたかもサッカーボールのような革張り状にできているそうです。つまり継ぎ接ぎ状のボールが自分の自我です。その継ぎ接ぎは、自分が造るものではなく、そのひとと関係のあった大勢のひとたちが造ります。だから、そのひとと関係の深いひとの革は大きく、関係の浅いひとの革は小さいのです。私の自我の大きな部分を、美輪は造っていました。その革が今回引き裂かれてしまったのですから、苦しみや悲しみが起こってきました。破れてしまった自我が修復されるまでには、どれだけの時間があるのでしょうか。

改めて、彼女の存在とはいったい何だったのだろうかと問うてみても、よく分からないのです。彼女の「思い出」はたくさんありますが、どれを取ってみても、それは彼女の「断片の思い出」でしかありません。その「断片」が彼女全体ではありません。だから、まだ彼女の存在そのものは何だったのかが分からないのです。時折、悲しみがやって来るときがあります。それは必ず、彼女の「思い出」と共に浮かび上がってきます。日常に取り紛れているときには悲しみは起こりません。悲しみは、「思い出」なしには起こらないのです。

■「断片の思い出」をオモチャにする貪欲■ とんよく

この「断片の思い出」は彼女の「断片」であり、彼女全体、彼女そのものではないと思いました。その「断片」とは、私のお気に入りのオモチャではないのか。このオモチャが取り上げられて

悲しんでいるのではないのか。孫が、お気に入りのおモチャを取り上げられて泣いているのと、そうは変わらないと思ひ至りました。

彼女をオモチャにしているものは「貪欲」といふ煩惱です。見るもの、聞くもの、触るものすべてを自分のものにしたいという根元的欲望が「貪欲」です。この「貪欲」が彼女をオモチャにしていたのです。

そのことに気づいてからは、本当の彼女をそつとしておけるようになりました。そつとしておけるとは、私は「本当の彼女」を知らないという、ただそれだけのことです。

さらに「本当の彼女」とは、阿弥陀さんだと思つたのです。阿弥陀さんとは、人間にとつては、計り知ることができない存在という意味です。

逆に、阿弥陀さんが、私のところにやつて来て、四十五年間、生活を共にして支え、養育して下さつたのだと思ひ到りました。彼女はどこからやつて来たのか。それは阿弥陀さんの国からでした。ひとがひととして生まれるためには、何十億年も掛かっています。私を生んだ母、その母を生んだ母と、いのちの母はどこまでも辿ることができません。それを遡れば、何十億年のいのちの連鎖があり、それが私の目の前に、彼女を生み出した根源です。

■〈真・宗〉は「死なない」宗教■

私は「〈真・宗〉は『死なない』宗教」だと言つています。「死なない」といふのは、死を一人称で体験できないという意味です。死は「二人称」か、「三人称の死」しか知りません。一人称で体験できないのですから、本当の「死」を知らないのです。

知らないのに、あたかも知っていると錯覚しているのです。だから、「死」は人間にとつて幻想です。それも、錯覚しただけでなく、「冷たく、寂しく、暗い」ものとイメージしてしまひます。その底に暗躍しているものがあります。それが「貪欲」といふ煩惱です。

この「貪欲」が私を操つていふのです。これを見破ることが、彼女を本当の意味で大切にすることだと思ひました。煩惱の汚れた手で彼女を扱うのではなく、その手を明け渡す。

安田理深先生は、「夫は夫自身を愛するために妻を愛し、妻は妻自身を愛するために夫を愛する」と言われます。人間に於ける愛とは、自己愛であり、「貪欲の愛」、つまり「貪愛」です。

人間には純粋な愛などありません。すべては自己愛以外にないのです。これほど、完膚なきまでに人間が解明され腑分けされてしまうと、もう人間に夢を見ることなどできません。

■ちよつと先に行つて、私を待つてゐる■

テーマを「坊守が『死』にまじした」と書きましたが、それはあえて、人目を引きやすくだけです。本当は「死」んではないのです。それでは「生きて」いるのかと言へば、「生きて」もいないのです。「死」が幻想ならば、その裏に張り付いてゐる「生」も幻想です。そうやつて、「生と死」が共に幻想だと目覚めることを、親鸞は、「往生」といふ言葉で暗示されたようです。「浄土」とは、目と鼻の先にあるのですが、永遠の遠さを持つてあるのです。だから、彼女は目と鼻の先にいるのです。私よりちよつとだけ先に行つて、私の席を取つてくれているのだと思ひます。また会える日は必ず来るので、いまは安心しております。

なごりおしく おもえども

松下 蓮（京都府亀岡市 延福寺衆徒）

終戦80年の節目であった今年8月。広島の原爆の日に特別番組を観ていたときに、長崎の母から電話がありました。父の熱が数週間も続き、気になるので入院した、ということでした。大したことなければいいなと安易に考えていたら、その後、頻繁に母から連絡が来て、もしかしたらあまり良くないのかもという雰囲気を感じました。

父はもう長くないかも知れない。でもそんなこと、あんまり考えたくもない。

私の方もお盆参りを控え、すぐにお見舞いに帰れる状況ではありません。母から電話がかかってくるたびに、「大丈夫、きっと良くなる」という安心したい思いと、「もしかしたらもうだめかもしれない」という不安でたまらない思いが交差していました。どちらも根拠は全くありません。

そのうち「もしかしたらもうだめかも」という不安でたまらない思いがだんだん大きくなって、その言葉が支配してきそうになったお盆の最中のころ、なぜか次の言葉が頭の中にやってきては消え、やってきては消え、繰り返すようになりました。

「なごりおしくおもえども、娑婆の縁つきで、ちからなくしておわるときに、かの土へはまいるべきなり。」

あれ…？ これはどこで聞いた言葉だっけ。そう、歎異抄だ、

と思いました。もう起き上がることも難しく、力なくして終わろうとしているかも知れない父の姿。遠く離れて見えないけれど、そんな父の姿が想像できます。どうしようもない痛み苦しみのなかで、ひとりでこの世界から離れていかなければならない。この言葉ほど人間の身の丈に合った言葉は他にないのではないかと考えたのでした。

『歎異抄』の第九条は、こんな話でした。弟子の唯円が、「念仏申してもちつとも喜びの心が湧いてこず、浄土に生まれたいと思う心もちつとも湧いてこないのです。念仏申しているのにもかかわらずですよ。これはどうしたものでしょうか？」そんな問いに親鸞聖人が応えるシーンです。「いつまでもこの娑婆世界に愛着がありますよね。そんな煩惱のせいで、わたし親鸞も浄土に行きたいと思う気持ちがちつとも起こらないのですよ。唯円よ、あなたもだったのですね、わたしもなんです。この、どうしようもない世界から離れたくないのです。あまりにも愛着が大きすぎるせいです。浄土なんてどんなところかもわからないのです。そんなところにどうやっていけるもんですか。でも、いくらこの娑婆世界が名残惜しいと思っても、縁が尽きるときは尽きる。どんなに力強く生きていきたいと思っても最後は自らの意思なんてちっぽけで役に立たないですよ。力なく、弱々しく、この命を終えていかなければなりません。ひとりさみしく、でも必ず浄土に呼ばれて、そこに参ることしかできません。」

私は親鸞聖人と唯円の会話をこのように勝手に意識して、父の姿と重ね合わせていました。家事をしながら、運転をしながら、この言葉が毎日頭の中でグルグル回り、離れないのです。今、力

なくして終わろうとしている父の命に私は会いに行かなくては。やっと怒涛のお盆が終わり、明日には父に会いに行ける！と、娘と一緒に、予約しておいた夜行バスに乗る準備をしていたところでした。母から電話があり、「お父さんは亡くなりました」と告げられました。



その後、何日も何日も、実家の寺でたくさんの人と一緒に弔いをしました。最初は、まだお内仏に横たわっている父の死に顔を何度も何度も見に行きました。何度もその顔に手で触れました。でもとにかく悲しむ暇はありませんでした。思い出に浸る時間もなかったと思います。とにかくお寺には人がたくさん来て、やることがたくさんあったのです。もしかしたら、今思うと、自ら忙しくすることで底なしの寂しさに沈むことを避けていたのかも知れません。父は、娑婆の縁尽きて力なくして終わっただけ。父もたくさん人間が体験してきた死というものを、当たり前に体験しただけ。それは当たり前のこと、と。それで自分自身を納得させていたように思います。

釈尊は、生老病死の四苦から解放されたいと出家しました。それは人類共通の、求道の姿でもあります。父はもう病院で苦しくて苦しくて仕方がない時に、見舞いに来た弟に「やっぱり老病死はきつかね」と言ったそうです。歳をとり、病気をすること、自分の思いどおりにならないことに戸惑ったこともあったでしょう。今までにない苦しみだったでしょう。身をもつて、いよいよ釈尊の求道への根本を感じ取ったのかも知れません。一方で、孫たちには「オジジは今から死んで見すっけんね、よう見とかん

ばよ」とも言っていたらしいです。こちらはなんとなく力強い言葉にも聞こえます。とても父らしいと思いました。生まれたら必ず死ななければならぬ。そんな姿をしつかり孫たちに見せたかったのでしょう。死にゆく人が言葉にして残せるということとても稀有な事かも知れません。このような、弱々しい言葉も、力強い言葉も、じつはどっちの言葉も本当だと思います。

常々父は、「お聖教の言葉をよく聞いていきなさい」と言っていました。こう書く僧侶として立派な父親のように聞こえますが、どうしようもない父に見える時期もありましたし、矛盾だらけのこともいっぱいありました。人間というものは深く深く知れば知るほど矛盾だらけだというのも父に学びました。人間の矛盾というものの、そんなものをかかえて、なにか求めずにはいられない姿、というものを、同時に自分のこととして実感する出来事でありました。

10月には満中陰が終わり、父の書棚から仏教書を一冊拝借してきました。安田理深著『教行信証真仏土巻聴記I』です。私は自宅でこの本を少しずつ読んでいます。とても難しい本です。父が所々に付箋を貼り、赤えんぴつで線を引いた箇所があります。その中で目に止まった文章がありました。「我々が光を放つのではなく、光となった仏、仏となった仏、我々を仏とするはたらきが仏である。だから我々にははたらきにまかせることのみが残されている。はたらきに乗ずるのみ、これを「ただ信心をして求念せしむ」とあるわけである」(214ページ)。はたらきに乗ずるのみ。私たちはこの世界で、あらゆる苦しみに関わなければならない人生なのに、なぜがそこから離れがたい。その自分が、光の如

来に触れたら自然と浄土という世界に呼ばれ、参ることになる。このあとにこう続きます。「我々はこのはたらきを拒むのである」(同ページ) 私たちは拒むのです。ということは、私が呼ばれたと思うが思うまいが、はたらきに乗ぜられるということが自然の道理だということです。そんなことを思うと、親鸞聖人が唯円に語った言葉、「かの土へはまいるべきなり」というのは、親鸞聖人をして、如来が言わしめた言葉ではないかなと思います。

私にふと歎異抄の言葉を思い出させ、考えさせたものは何だろうと思うことがあります。安易に、父が仏として私にはたらいたのだと、答えのように言うことはあまりしたくありません。言ったらなにか終わってしまうような気がします。このことは少し、じっくり、ずっと、考えてみたいと思います。もうすぐ父の百ヶ日がやってきました。

■松下蓮さんは、美輪(坊守)の従兄弟である亀井廣道住職の娘さんです。廣道さんとは、私も美輪の実家である大分県(宇佐市)の徳台寺で何度もお会いしました。長崎弁の流暢な、一家言をお持ちの真宗僧侶でした。この夏に浄土へお還りになりました。私は美輪の病室で、そのことを告げました。若い頃の廣道さんは素敵な青年で、従兄弟の中では憧れのひとだったようです。美輪の中でも「憧れのお兄ちゃん」だったと言っていました。ひとは物理的には一人の存在です。しかし、ひとは、そのひとと関係のあった数だけ存在します。百人と関係したなら、百のそのひとが存在するのです。娘と父という関係にあった廣道さん。今回、その中の想いを綴ってもらいました。

住職

【遺稿】 坊守・武田 美輪

「おまんは誰じゃ！」

どういてここにおるがじゃ。」

※「おまんは誰じゃ！どういてここにおるがじゃ」(NHKの朝ドラ「らんまん」の牧野万太郎の名ゼリフ)。

◆◆◆

突然、大きな窓ガラスの外側にピタッとくっ付いているカメムシが目飛び込んできた。

ここは、都内大病院の十九階の病室の窓だ。思わず、そう叫んでいたのは私だ。

眼下には、ミニカーのような車たちが交差点に行儀よく並んでいるのが見える。「ここの高さは、鳥たちの領域ではないの？」と、カメムシに問いかけた。

この病室にいる私は、二〇一九年の暮れに見つかった大腸ガン(ステージ4)と告げられ、翌年に大腸、二ヶ月後には転移した肺を四十%切除、そして今回は前回の手術から三年半後、肝臓に転移したガンの手術を受けるために入院している。その病室での出来事だった。

コロナは落ち着いてきたものの、家族との面会さえできないという入院生活を強いられていた。自坊では、間近に報恩講、並びに創建四百年の記念法要を迎えることになっており、焦燥感が襲

ってきた。当初は、創建四百年という節目に、しかも坊守という立場であることが、まるで四百年という歴史の崖っぷちにでも立たされたように感じられた。病の方もどうなるか分からない。これから先の不安との戦いの中だった。

とは言え、術後、数日もすると、散歩が許され、八階にある屋上庭園に足を運ぶのが唯一の楽しみとなった。

常緑樹に加え、萩や野牡丹、紫式部など、秋の草花が植えられ、車いすに乗った患者や、リハビリ中の人たちが気分転換をするためのオアシスだった。

曲がりくねった散歩道を一周すると、ベンチがあり、そこに腰を掛け、しばらく色とりどりの草花を眺めていると、日々の治療の辛さも慰められた。座った後ろの下草の中に、思わず声を上げたくなるくらいの小さな、小さな花が一輪咲いていた。

それも五ミリくらいの黄色い花。それはカタバミの花だった。黄色でパツと開いた五枚の花弁は、まるで金バッチのように輝いて見えた。

「そのままでもいい。そのままが私なのだから」と言われた気がした。ただそこにいる、それ以上でもなく、それ以下でもない。そのことがなんと尊いことか。私は何になろうとしていたのだろう。

「おまんは誰じゃ?」。カメムシへの問いかけが、実はカメムシから私自身に向けられた問いだった。

明日はもうここにいないかもしれないカタバミの花は、「そのままがおまえじゃ」というコトバとなった。

阿弥陀さんは七変化。カメムシにもなれば、カタバミの花にも

なつて、私のいまを教えて下さった。崖っぷちに立たされていると思っていたが、足はすでに歩んでいた。

カタバミの花も私も地続きであることを教えてもらった。

これは創建四百年どころではない。いのちの歴史と未来からの時間がピッタリと合わさったいま、それが「そのままがおまえじゃ」といだけた。さらに、病とも一つになることができた、大事な一日となった。

■この文章は、坊守・武田美輪が、「サンガ189号」（二〇二四年五月一日発行）に掲載した文章です。「サンガ」とは東本願寺（真宗会館）が発行している冊子です。この冊子に「お寺の掲示板」というコーナーがあり、ここへの執筆依頼でした。もともと「お寺の掲示板」にはテーマが与えられていました。それが「小山貞子」さんの「そのまゝが、おまへじゃ」です。美輪は、このテーマを念頭に置きながら、この文章を綴りました。この「そのまゝが、おまへじゃ」は、小山さんが誰かに向かつて語った言葉ではないでしょう。これは小山さん自身が、仏さまから直々に受け取った言葉ではないでしょうか。美輪は、そのことをカメムシと小さな黄色いカタバミの花から受け取ったようです。本文でも「阿弥陀さんは七変化。カメムシにもなれば、カタバミの花にもなつて、私のいまを教えて下さった。」と書かれています。やはり、この世は、〈私一人〉を教育する、阿弥陀さんの^{うそ}筈の学校なのでしょう。生まれて来るのも一人、この世を去っていくのも一人。気がつけば、私は、たった〈一人〉としてこの世に生み出されています。それなので、私をこの世に生み出した阿弥陀さんとだけ、「本音の対話」ができるようになっていくのでしょう。

住職

◇ご命日の集い◇

2月15日(日)
4月26日(日)

午後2時～(受付1時半)
冥加志 お一人五百円

住職新刊本発売



『＜真実＞のデッサン9』
実費冥加金500円

◇写経の会◇

毎月1回 午後1時半～4時頃まで

開催日：1月14日(水) 2月18日(水) 3月11日(水)

4月8日(水)

教材：正信偈、仏説阿弥陀經、仏説無量壽經(上下)

冥加志：初回は三千円(教材費込み) 二回目以降五百円

一時間程写経に集中し、その後は本堂で勤行(おつとめ)をします。お菓子とお茶を飲みながらワイワイ座談をする会です。写経のみの参加でも構いません。

◇ブッディサロン◇(輪読会)

一冊の本を皆で輪読した後、お酒と肴と仏法を味わいながら、語らう会です。参加されるかたは職種も様々、住所も様々、何も強制されることはありません。どなたでも参加自由です。

開催日：1月25日(日) 2月15日(日) 3月29日(日)

4月26日(日)

冥加志：お一人千円 ※遅刻、早退自由です。

元旦・因速寺修正会

一月一日(木) 午前10時～

参加費 千円

一年の始まりを阿弥陀さんの前から始めてみませんか?
辛酒・甘酒を用意して皆様をお待ちしております。



雑言雑語

今年が目まぐるしい一年だった。特に母との別れが大きい出来事だった。思い返してみると私は、中学生から非行に走り、朝帰りをすると、母は寝ずに帰りを待っていて、私は必ず一発殴られる。たかが一発でもそれが嫌で、流石にもう待つていないだろう時間に帰ってきてきても必ず待つていた。とうとう堪忍袋の緒が切れたのか、「あんたがそんな生活をするのなら」とバリカンを自分の頭に当てて髪を剃ろうとした。思わず「お前に関係ねえだろ」とバリカンを取り上げた。「じゃどうすればいいんだよ」と聞くと「新聞配達でもしてバイトしなさい」と言われ、中学生はバイトを続けた。そして高校に入り、一校目は中退、二校目で漸くいい先生と出会った。毎日バイク通学可なんでもありの高校は本当に楽しかった。そしてバイクの配達屋に就職もし、順風満帆に行くかと思いきや、車で、夜中の田舎道で事故を起こした。軽くぶつかった相手は金髪の兄ちゃん、咄嗟に現場から逃げて、タイヤ交換をして逃げ切った。それが次の日、指名手配で自宅に逮捕された。その姿を見て母親は嘔吐していた。心配ばかりかけた私をずっと阿弥陀さんの世界に出遇って欲しいと願い続け、拘留中に先輩の言葉を思い出した。「人生に困ったら専修学院に行け」。釈放されてから「今しかない」と半年間でお経を覚えて専修学院の門を叩いた。始めて遇う竹中院長に「君のような子を持つたんだよ。」と抱き締められた。

表紙画題

『大好き』

佐々木瑞穂さん



『よびぐえ』一四二号

発行所 因速寺(真宗大谷派 本山 東本願寺)

〒136-0074 東京都江東区東砂1の4の10

☎(03) 3644-0986 FAX(03) 3648-4391

Email info@insokuji.com

HP https://insokuji.com

編集・発行 武田 定光 Takeda Jyouko

発行日 二〇二五(令和七)年十一月十五日

Copyright 1990 INSOKU-JI Printed in Japan